

## 看護の現場より

看護学生みなさんに、私たちが日々看護を  
実践している現場での奮闘ぶりや、看護に  
対する熱い思いをシリーズで紹介します。

### コロナ第5波で感じた大切なこと ～困っている人に寄り添える看護を目指して～

神戸協同病院 手術・中央材料室  
安田 由季さん



#### ■ 私の職場

私の働いている職場は、スタッフ4名と少ないですが、常に笑いが絶えず、明るく楽しい職場です。

手術では、腰椎麻酔での骨折や変形性膝関節症などの整形をメインに、局所麻酔下で外科手術も行っています。

安全な手術が行えるよう、術前に患者さんの情報収集を行い、医師とカンファレンスを行います。また、患者さんに安心していただくよう術前訪問も行っています。

中央材料室では、手術で使用する器材の他、病棟・外来で使用した器材を回収し、洗浄・滅菌を行いそれぞれの部署に返却するといった業務を担っています。

その他、外来での処置業務や病棟でのシーツやマット交換など多岐に渡り他部署への支援も行っています。コロナ感染が流行してからは、抗原検査の実施、ワクチン接種、コロナ陽性自宅療養者の対応、抗体療法も行っています。コロナ陽性自宅療養者対応(\*)は第5・6波だけで、100件以上受け入れてきました。

#### \*コロナ陽性自宅療養者対応

コロナに感染し在宅で療養中に状態が悪くなった方を、保健所からの依頼で診察・検査・薬の処方を行います。重症または重症になる恐れがある方は、在宅酸素の導入や保健所を通じて他院へ転送または入院となりますが、病床の逼迫により入院が困難で在宅へ戻る方に対しては、その後も電話連絡を行い状態観察を行います。

#### ■ 医療逼迫と患者さんの不安を 目の当たりにした第5波

2021年7月頃よりデルタ株による感染が猛威をふるい、感染者数が増加しました。高齢者のワクチン接種が進む中、コロナに罹患し在宅で療養されていた20代～50代と年齢の若い方が、状態が悪くなり受診されました。連日保健所から依頼があり、通常業務を行いながら、1日2～3件(多い時は4件)の患者さんを受け入れました。受診される多くの方が1週間38度以上の高熱が続き、飲食が出来ず体力が低下している状態でした。普段元気に日常生活を送られている方も、歩くのがやっとという状態で話しをするのも辛い状況でした。

病院に到着し、採血やCTの検査を行い、必要時は点滴もします。状態は様々でしたが、ほとんどの方が肺炎を患っておりステロイドの治療が必要でした。中には自覚症状は乏しいものの、酸素飽和度が低下しており、入院に至るケースも何件ありました。病院に到着した時は、歩くのも話すのもやっとという状態の方も、診察を終えて帰る時には、自分の状態が確認でき治療が受けられるという安堵感からか、少し表情が穏やかになりました。



発熱外来前室-PPE

ステロイド内服が必要なお方へは、その後も状態と内服確認のため電話で連絡を行いました。日に日に状態が回復し発声に活気が戻り、元気を取り戻してくれることが、日々の私たちの励みにもなりました。



現在もコロナ対応に奔走中

コロナ感染流行前は、風邪症状や熱が出た時、気軽に病院を受診出来ていましたが今は出来ません。コロナにかかると隔離が必要となり、状態が悪化してもまずは保健所を通して診察できる病院を探してもらう必要があります。高熱が出て体力が消耗していく中、医療が逼迫することで受診先も見つからず、これからどうなるのだろうという恐怖の中で過ごすことは不安であったと思います。

## ■ 誰もが安心して治療が受けられるように

この経験を通し、改めて必要な時に必要な診察や治療が受けられるという医療のあるべき姿の重要性を感じました。患者さんの自覚症状も表現の仕方も異なる中、短時間の関わりで必要事項を絞り情報収集をすることの難しさ、症状の変化や危険因子を見逃さないための観察力が重要であることを学びました。

電話フォローでは、顔が見えない中での状態把握と



ベッドサイドでコロナの検査をしている安田看護師

医師への追加治療の有無を見極める必要があります。日頃からの観察力とコミュニケーション技術の重要性を改めて感じる貴重な時間となりました。そして何より、医師を含め他職種との連携が不可欠であり、チーム医療の大切さを実感しました。



発熱外来検体採取室(室内Cタイプ)

この経験を自信に変え、これからも困っている人に寄り添える看護を提供していけるよう努力していきたいです。

## ■ 追記

先日、抗体療法(ゼビュディ)を受けられた方を対象に、その後の状態確認のため電話で対話しました。「元気です。ありがとうございます」と感染前と同様に日常生活を過ごされている方もいれば、「コロナによるものか分からないけどしんどい感じがする」と後遺症のような症状が残っている方もいました。隔離解除後も、コロナ感染による影響は残っており、継続した医療の提供が求められていることを感じました。

陽性者対応後、当院かかりつけでなければその後の状況は分かりません。専門治療が必要なため救急搬送された方、「味覚障害はいつ治りますか？」と今後の仕事について心配されていた料理人、要観察のため再度受診予定だった方も、再受診までに急変し他院へ運ばれた方……。短時間の関わりではありましたが、今も気になる患者さんがたくさんいます。みなさんが元気に過ごされていることを願います。